

樞法華方言における「潮」、「塩」の発音について

- 個人語のレベルでの一事例 - *

島田 武

The Pronunciation of the Word *Shio* in Todohokke Dialect: An Idiolectal Study

Takeshi SHIMADA

要旨：本稿では、樞法華方言における「潮」、「塩」という語の発音について、音響分析を通じて検討する。調査で採集された音声資料を聴取すると、本来の「シオ」が「スオ」または「ソ」として発音されている例が発見された。これまで「シオ」が「ショ」と発音されるという報告はあったが、「ソ」と発音されると指摘されたことはなかった。そこで「ソ」と発音されているサンプルを選択し、音響分析を行い、その結果をもともと「ソ」と発音されるサンプルと比較した。その結果、両者の間に差がないことが示された。

キーワード：樞法華方言 母音変化 一つ仮名 潮の名前

1. 緒言

筆者を含む3名からなる「旧樞法華村における伝統的漁業・造船に関する語彙調査」グループは2013年8月に樞法華に赴き、現役の漁師の方から、漁に関わる風、潮、漁具、漁獲物等の語彙を収集した。その際に、その方の「潮」に関わる語彙の発音が特徴的であることが判明した。そこで本稿では、「潮」の発音に焦点を当て、音響分析を行う。

2. 北海道方言における「シオ」の発音

北海道方言においては、「シオ」が「ショ」として発音されることがある。石垣(1983)には「ショ」という発音が「塩」または「潮流」を表す語として記述されている。以下に例を挙げる¹。

¹ 査読者から、石垣(1983)にはシオガレ(=ショシ)、シオゴミ(満潮)、シオシル(干潮になる)、シオナミ(潮流に風が吹きつけて起こる波)、シオビキ(塩サケ)、ハラシオ(陸から沖への出し潮)のように「シオ」が変化しない例も挙がっていると指摘があった。現在のところ「ショ」になる原因、ならない原因は判明していない。シオシルのようにショシル(=6)の形も採録されているところから判断すると、地域差または個人差と見ることもできる。

- (1) ショ 塩、潮流
- (2) ショアンベ 潮流の具合
- (3) ショガワリ 潮流の変わる事、またそのところ、時刻
- (4) ショシ 潮が引く事
- (5) ショシル 潮が引く。干潮になる
- (6) ショスル 塩をふりかける
- (7) ショダテ 潮と潮がぶつかって盛り上がる事
- (8) ショダマリ 潮だまり
- (9) ショダルミ 潮変わりのときに潮がゆるむ事
- (10) ショッパイ 塩辛い
- (11) エサンジョ 鹿部方面（北西）から恵山方面（南東）に向かって流れる潮
- (12) サゲショ 日本海側から太平洋側に向かって流れる潮
- (13) デショ 出潮。沖に向かって流れる潮

以上の例を見ると、(6)と(10)は食塩の事であり、それ以外は潮の事なので、意味は異なっているものの、どれも一貫して「シオ」という発音が「ショ」に変化していることが分かる。

3. 樞法華方言における「シオ（潮）」の発音

北海道の中でも、現在調査中である樞法華地域において同様の現象が認められる。実際に前節の(2)と(6)は、樞法華で採録されている。しかしながら、2013年8月に行った調査において、「シオ」を「ソ」として発音される事例が発見された。この「ソ」という発音は、管見ではこれまでの先行研究において報告されたことのないものである。

そこで本稿では「シオ」が「ソ」と発音された場合、もともと「ソ」と発音されるものと区別され得るのかどうかを検証したい。

3.1. 樞法華方言の「シオ」の音響分析

本節では収集した音声資料の中から「シオ」が「ソ」として発音されているものと、もともと「ソ」として発音されているものを選び、両者の音響的差異の有無を探る。

3.2. 方法

今回の音声の提供者は、田中末廣氏（昭和10年生まれ、男性）で、2013年8月28日に自宅に伺い、自由に会話をしているところを録音した。録音はSONY社製デジタルビデオレコーダーDCR-SR100を用い、サンプリング周波数48kHz、音声形式はPCMで行った。音声を抽出後、「シオ」に相当し、「ソ」と発音されていると思われる音声と、もともと「ソ」と発音されている音声を切り出した。それらの母音に対してPraatを用いてフォルマント解析を

行い、第1フォルマント(F1)、第2フォルマント(F2)、第3フォルマント(F3)の値を求めた。単位はHzである。これらの値に基づき、基本統計量を求めた。

3.3. 結果と考察

今回田中氏の発話から得た「シオ」に相当する母音のデータは以下の通りである。該当する母音は下線部の「ソ」、「ゾ」に含まれている。

	F1	F2	F3
ソアンバイ	515	1083	2886
デソ	430	921	2548
ハライソ	504	1044	2032
ツコミソ	501	1038	2028
カエリソ	514	1037	2819
コトシノソ	456	1016	2499
オオソ	491	1051	2385
ウチコミソ	561	1120	2553
カヤベソ	549	939	2582
エサンゾ	450	994	2460

表1:「シオ」に相当する母音のF1、F2、F3の値

	平均値	標準偏差	分散	最大値	最小値
F1	497	41	1762	560	429
F2	1024	60	3648	1119	921
F3	2479	281	79475	2886	2028

表2:「シオ」に相当する母音の基本統計量

次に、もともと「ソ」と発音されている母音のデータを以下に示す。

	F1	F2	F3
ソントキ	476	843	2298
エソブネ	512	1176	2619
ソイツラ	478	963	2372
ソコデ	516	896	2986
ソノ	514	908	2449
ソレ	461	1074	2238
ソレデ	501	994	2344
ソレデモ	399	1010	2254
スケソウ	511	1095	2567
ソレガ	482	1076	2326

表 3 : 「ソ」の母音の F1、F2、F3 の値

	平均値	標準偏差	分散	最大値	最小値
F1	485	35	1280	516	399
F2	1003	103	10710	1175	842
F3	2445	228	52011	2986	2238

表 4 : 「ソ」の母音の基本統計量

3.3.1. 母音の比較

本節では 3.3 節で得られたデータに基づき両者の母音の比較を行う。以下では便宜上「シオ」の母音を「shio」、もともと「ソ」と発音されているものを「so」と表記する。

まず F1 の平均値に関しては、「shio」は 497Hz、「so」は 485Hz であった。次に F2 の平均値に関しては、「shio」は 1024Hz、「so」は 1003Hz であった。最後に F3 の平均値に関しては、「shio」は 2479Hz、「so」は 2445Hz であった。これらの数値から、平均値に関しては著しい違いは見当たらなかった。

次に個々の値のばらつきを視覚化するため、以下に表 1 と表 3 の数値に基づき作成した F1-F2 図と F2-F3 図を掲げる。F1-F2 図は縦軸が F1、横軸が F2、F2-F3 図は縦軸が F3、横軸が F2 である。

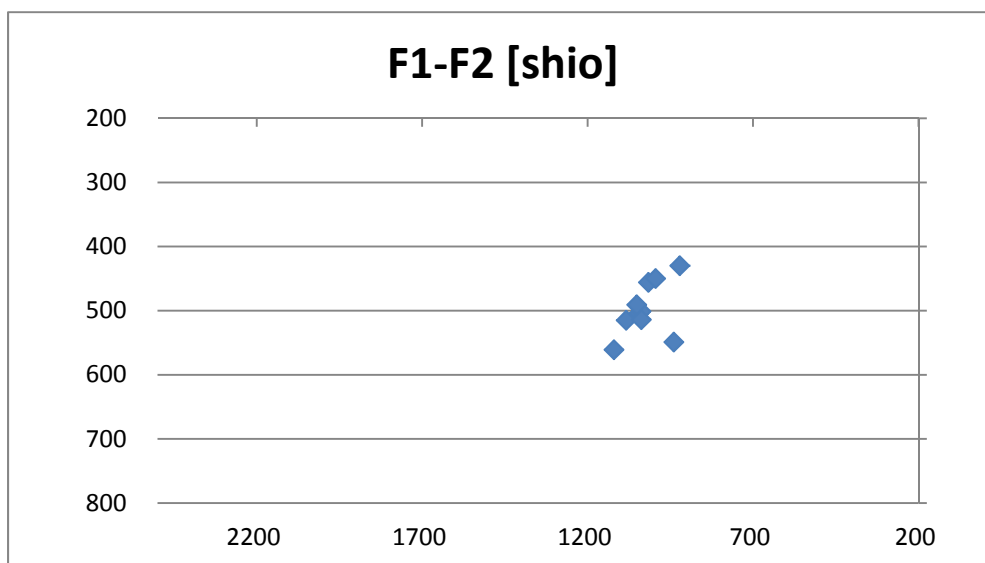


図 1. 「shio」の F1-F2 図

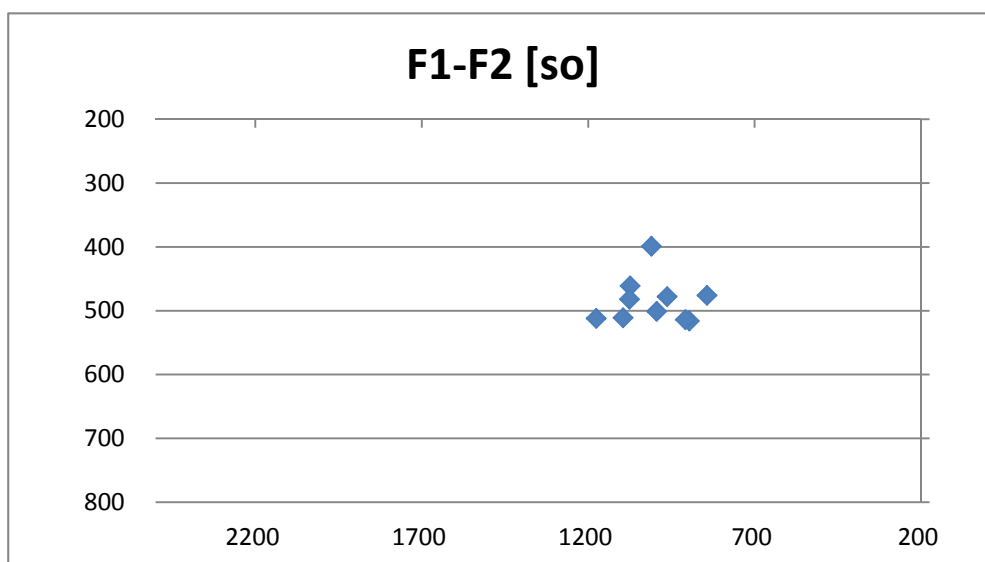


図 2. 「so」の F1-F2 図

図 1 と図 2 を比較すると、F1 に関しては「shio」の方が「so」のよりもわずかにばらつきが大きいことが分かるが、F 検定 ($p=0.32$) と t 検定 ($p=0.28$) とともに有意差は無かった。F1 とは反対に、F2 に関しては「so」の方が「shio」よりもばらつきが大きい。両者の分散値も差が大きいだが、F 検定 ($p=0.06$) と t 検定 ($p=0.33$) に有意差は認められなかった。

として現れうる。したがって榎法華方言では、「シオ」には以下のような発音があることになる。

(14) 榎法華方言における「シオ」の発音の種類²

- a. シオ
- b. ショ
- c. スオ
- d. ソ

今回の協力者である田中氏は一貫して「ソ」と発音していたが、田中氏の奥様からは(14a)から(14d)のいずれの発音も観察することができた。このことから、榎法華方言において「シオ」という語彙の発音に関しては個人間で揺れがあり、(14a~d)の全てを使う人もいれば、どれかを一貫して使う人もいることが判明した。このことは、「シオ」を「ソ」と発音する現象が、田中氏の個人語的な現象なのか、榎法華方言に広く見られる一般的な現象なのかを判断するためには、さらに調査が必要であることを示している。

筆者は当初、調査を行っている際には、「ソ」と聞こえているが、音響解析をすれば「スオ」と発音していることが判明するであろうと考えていた。しかし実際に音響解析を行って見ても、「スオ」という発音をしている証拠は見当たらなかった。それでもなお、「シオ」が「ソ」と発音されたものと、もともとの「ソ」を比較すれば、何らかの違いが現れると考えていたが、統計的に有意差は認められず、異なる母音であると断定することはできなかったのである。

4. 結語

本稿では、榎法華方言における「シオ」を「ソ」と発音するという現象に焦点を当て、もともとの「ソ」と母音の発音が同じであることを明らかにした。これからの課題としては、子音[s]の性質、[s]から[o]へのわたり、アクセントの影響、母音内部のピッチ変動などの音そのものへの精密な分析がある。それに加えて「シオ」を「ソ」と発音する現象が、榎法華方言において一般的に観察されるのか、世代間で発音に差はあるのか、石垣(1983)に見られる「ショ」という発音はどれくらい観察されるのかなどの疑問に答えるべく、調査を継続していく必要がある。

謝辞

*調査協力者の田中末廣氏、奥様の田中美枝子氏には長時間にわたるにもかかわらず、録音時に多大な配慮と協力をいただいた。ここに記して感謝を申し上げます。

本稿は文部科学省科学研究費補助金基盤研究C一般「旧榎法華村における伝統的漁業・造船に関する語

² 可能性として、さらにシヨという発音も想定される。

「調査」課題番号：23520540（研究代表者：橋本邦彦）による研究の成果の一部によるものである。共同研究者の橋本邦彦教授、塩谷亨教授には調査の際惜しめない協力を頂いたことに御礼申し上げます。

また 2 名の匿名査読者の方からは貴重なコメントをいただいた。言うまでもなく本稿における誤りはすべて著者に責任がある。

参考文献

- 五十嵐三郎(1982)「北海道方言の概説」,『講座方言学 4 - 北海道東北地方の方言 - 』, p1-62, 国書刊行会.
石垣福雄 (1977)『日本語と北海道方言』, 北海道新聞社, 札幌 .
_____ (1982)「北海道沿岸部の方言」,『講座方言学 4 - 北海道東北地方の方言 - 』, p63-92, 国書刊行会.
_____ (1983)『北海道方言辞典』 北海道新聞社.
大沢哲夫 (1970)『ほっかいどう語 - その発生と変遷 - 』(五十嵐三郎・長谷川清喜・佐藤誠・石垣福雄・渡辺茂監修), 北海道新聞社, 札幌 .
島田 武(2003)「椴法華方言の中舌母音について」,『認知科学研究』第 2 号, p59-74, 室蘭認知科学研究会.
平山輝男・小野米一・石垣福雄・道場優 (1997)『北海道のことば』明治書院, 東京 .

執筆者紹介

氏名：島田 武

所属：室蘭工業大学

Email：shim@mmm.muroran-it.ac.jp